

2月 依存症家族勉強会のお知らせ

1月12日 徳島ダルクフォーラムで考えたこと

昨年に引き続き、大阪ダルクの倉田めばさんにおいでいただき、徳島ダルクフォーラムが当院研修ホールで開催されました。

『回復に殺される』

昨年のフォーラムで倉田めばさんの話を聞いて、ずっと心に残っていたのがこの言葉です。この1年、これはいったいどういうことなのか考えてきました。「こういうのが回復だ」という決めつけにしばられる、「～でなければ回復じゃない」に囚われることでクスリは止まっても苦しくてたまらない、そういうことを言っているのだろうか。講演で「良い体験談」を期待される・されているというプレッシャーで苦しい、体験談を語ることで全然楽にならない、という事を言っているのだろうか。いろいろ考える中で、当事者の体験談をどう聞いてきたのかということに行きつきました。

マスコミ取材のときの違和感

犯罪でもある行動を繰り返してしまう行動依存があります。万引きや盗撮がそうです。そういう行動を止めるために勉強会を開催しています。ある関西のテレビ局がその勉強会の取材を申し込んできました。クレプトマニア(窃盗症)の勉強会なので、取材の前に僕の書いた本を全部まず読んでほしいとお願いしました。勉強会の様子をカメラで撮りたいという希望でしたが、お断りしました。勉強会に参加している人をカメラで写されて放送されるなんて、とんでもないことだからです。それでもいいなら勉強会に参加してもいいと言うと、勉強会に来ました。取材でいろいろ話していても、どうも僕の本を読んでいるようには思えません。いちばんひっかかったのは「絵になる映像が欲しい」ということでした。放映したときに人の目を引く映像です。一番良いのは当事者の映像です。当然、それはお断りして取材は終わりました。その後、なしのつぶてです。なんの連絡もありません。彼らにとって当事者は単なる「商品」でしかないのでは、という疑念が生

まれました。番組になったり、ニュースになったあとも当事者の生活は続きます。取材を受けた人のその後の生活にどのような影響が出るのか、僕が最も気になるところです。そこまで責任持てないと割り切って取材をしているのだろうか、そういうことすら考えていないのか。疑問は尽きません。

講演会のアンケートから受ける違和感

同じような違和感を持つことが実はほかにもあります。いろんな講演会を開催するのですが、アンケートで「もっと当事者や家族の話を聞きたかった」というコメントに時々出会います。この「もっと」という一言にひっかかります。この一言から不満の要素を聞き取るのは過剰反応でしょうか。なぜ「もっと」が出てくるのだろうか？当事者や家族が自分の体験を語るということが簡単にできているのだろうか？体験談を語って当たり前と思っていないだろうか？直接自分の知らない人を相手に体験を話すということの重みをどれほど考えているのだろうか？と思うのです。話したことがその人のその後の人生にどんな影響を与えるのかということを考えるのはとても大事なことで僕は考えています。でなければ体験談も単なる情報として「消費」されていくしかないのではないのでしょうか。

体験談の「消費」から体験談と「ともにある聞き方」へ

ここにあげた違和感が生まれる元にあるものは僕にもあるのだということをお忘れないようにしたいわけです。聞く側は「良い話が聞けた」「他では聞けない話を聞けてよかった」で終わってはいけません。聞く側はそれができる立場です。その立場の自覚が欠かせないのです。ある種「消費」的な聞き方が暗黙の裡に「こんな話が聞きたい」という一方的な期待を生み、それにこたえることである種の自己評価が生まれる。そういう環境では語る人が真に楽に、穏やかになっていくことはないのではないのでしょうか。語った人が語った後もその影響を受けながら生きていくように、聞く人も聞いたことを心に留めながら聞いたこととともに生きていく、そういうような聞き方が必要なのではないか、そういう聞き方ができるのではないか。聞く側の姿勢や心構えが問われていると思います。

家族勉強会Aについて 参加ご希望の方は、当院アディクション委員まで連絡いただくか、アンケート用紙にその旨を書いて郵送してください。参加できるかどうか折り返し連絡します。
※動画配信について 家族勉強会Aに参加できない方のために勉強会を録画しています。これまでと同じ形で配信します。

家族勉強会Bについて 参加ご希望の方は当院アディクション委員までご一報ください。

2月 8日(土)AM10時～家族勉強会B(意見交換会)/依存症研究所・研修ホール
2月22日(土)AM10時～家族勉強会A(講義)/依存症研究所・研修ホール